

ルボ貧困大国アメリカ

堤 未果

Mika Tsutsumi

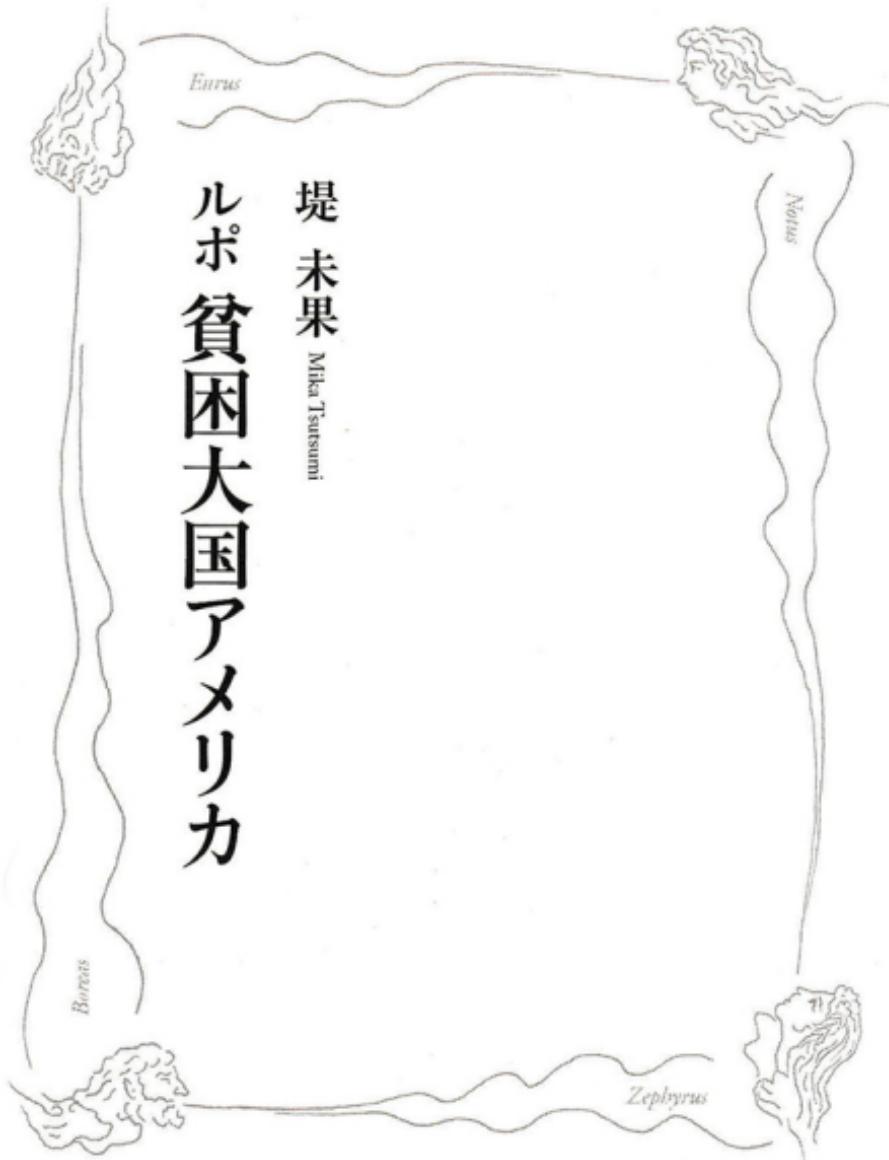
岩波新書
1112

Eurus

Notus

Boreas

Zephyrus



目 次

プロローグ

第1章 貧困が生み出す肥満国民

新自由主義登場によつて失われたアメリカの中流家庭／なぜ貧困児童に肥満児が多いのか／フードスタンプで暮らす人々／アメリカ国内の飢餓人口

コラム① 間違いだらけの肥満児対策

第2章 民営化による国内難民と自由化による経済難民

人災だつたハリケーン・カトリーナ／「民営化」の罠／棄民となつた被災者たち／「再建」ではなく「削除」されたニューオーリンズの貧困地域／学校の民営化／「自由競争」が生み出す経済難民たち

コラム② ニューオーリンズの目に見えぬ宝

第3章 一度の病気で貧困層に転落する人々

世界一高い医療費で破産する中間層／日帰り出産する妊婦たち／競争による効率主義に追いつめられる医師たち／破綻していくアメリカの公的医療支援／株式会社化する病院／笑わない看護師たち／急増する医療過誤／急増する無保険者たち

コラム③ 不安の「フード・ファディズム」

第4章 出口をふさがれる若者たち

「落ちこぼれゼロ法」という名の裏口徵兵政策／経済的な徵兵制／ノルマに圧迫されるリクルーターたち／見えない高校生勧誘システム「JRCOTC」／民営化される学資ローン／軍の第二のターゲットはコミュニティ・カレッジの学生／カード地獄に陥る学生たち／学資ローン返済免除プログラム／魅惑のオンライン・ゲーム「アメリカズ・アーミー」／入隊しても貧困から抜け出せない／帰還後にはホームレスに

コラム④ 誰がメディアの裏側にいるのか？

第5章 世界中のワーキングプアが支える「民営化された戦争」

「素晴らしいお仕事の話があるんですね」／「これは戦争ではなく派遣という純粋なビジネスです」／ターゲットは世界中の貧困層／戦争で潤う民間戦争請負会社／見えない「傭兵」／一元化される個人情報と国民監視体制／国民身分証法／州兵としてイラク戦争を支えた日本人／「これは戦争だ」という実感

コラム⑤ テロより怖い民営化

エピローグ

初出一覧

あとがき

*本文中の写真のうち、*のついているものは、撮影＝香本果林、
それ以外のもので注記のないものは、著者による。

*本文中の肩書きは、基本的に取材当時のものである。為替相場は、
取材時に一番近い一ドル＝一一〇円に統一した。

プロローグ

一〇〇七年七月のカリフォルニア。うだるような暑さの中、マリオ・フェルナンデスは最後の荷物を車のトランクに詰め込んだ。妻のマリアは放心したように「差し押さえ物件」(Foreclosure)の札をつけられた家の前に立ちすくんでいる。

銀行の差し押さえ率が全米一であるここストックトンの町では、このひと月だけでこれと同じ札が三〇軒の家につけられた。サブプライムローンの支払い延滞で次々に空き家が増えた街は、今ではしんと静まりかえりすっかりゴーストタウンと化している。

サブプライムローンとは、社会的信用度の低い層向けの住宅ローンだ。一〇〇一年一月にアメリカ金融監督当局が出した通達によると、具体的には以下の四項目のうちどれかにあてはまる者が対象となる。

(一) 過去一二か月以内に三〇日延滞を二回以上、又は過去二四か月以内に六〇日延滞を一

回以上している。

(二) 過去二四か月以内に抵当権の実行と債務免除をされている。

(三) 過去五年以内に破産宣告を受けている。

(四) 返済負担額が収入の五〇%以上になる。

その利率は一般のプライム(優良顧客)と比べ非常に高く、最初の一、三年は利子が低いがその期間を過ぎると急激に一〇~一五%に跳ね上がる。月々の返済をするために親族一五人で一軒の家に住みながらローンを返す家族もいるが、ほとんどはマリオのように途中で払いきれなくなり、家を追い出されるケースが占めている。

マリオはため息をつくと、マリアに近づきその汗ばんだ肩をそつと抱いた。妻は彼を見上げると、無理やり泣き笑いの表情を作りながらこう言つた。

「ねえ、短い夢だったわね」

そう、確かに短かつた、とマリオは心の中でつぶやいた。だが同じ夢でも、自分たち一家に起こつたこの出来事は、底に穴のあいた船で必死にオールを動かすような悪夢ではなかつたか? マリオたちのような移民にとっての、この国で家を持つというアメリカン・ドリーム。到底手の届かないはずのそれがある日突然目の前に差し出されたら、誰だつて天にも昇る気持

ちで飛びつくだろう。

三年前のあの日、突然マリオの家を訪れた若い男。金融機関から来たというあの男は、自分は弱者の味方だと言つたはずだ。マリオたちのような低所得層の移民にも、家を持つ夢をかなえる権利があるはずだと。そしてその後に続いた言葉が、マリオの心をつかんだのだ。

「あなた方が国境を越えてやつてきたアメリカという国は、不可能を可能にする場所なんですよ」

それは二年前に自己破産をしており、クレジットカードは持つことがないマリオの頬を紅潮させた。恥ずかしさに思わず目をそらすと、男の着ている一目で高級だとわかるスーツが目に入った。

その光沢に目を奪われた自分に向かってさらに男が言つた言葉が今になって思い出され、マリオは唇をかみしめる。

自分や自分のような立場の人間を夢中にさせた、アメリカの不動産業界にはびこるあの神話。

「住宅価格は上がり続けますから」

あの時気づくべきだったのだ。神話は必ず崩壊する。



「差し押さえ物件」の札がつけられた家

機械工であるマリオの月収は貧困ラインぎりぎりだったが、何故かそれはまったく問題にならなかつた。所得証明用の給与明細の提出すら必要なく、すぐに五〇万ドル（五五〇〇万円）の融資が下りた。

だが月三一〇〇ドルのローンを返済するためにマリオとマリア、それに三人の息子たちがフルタイムで働いても、収入のほとんどは返済に回り、生活苦はひどくなる一方だつた。現金が足りなくなつても、一〇年前にメキシコから移住してきたマリオの家族は誰もクレジットカードを持っていない。生活は一変してほとんど返済のためだけに働くようになつてしまつたといふ。

支払いが苦しい月は利払い以下の返済でも大丈夫だと言われていたのが、払いきれない分はそつくり元本に組み入れられ、返済額が雪だるま式に増えていたことに気づいた時にはもう手遅れだつた。英語でびっしりと書かれた契約書はメキシコ人のマリオにはよくわからず、男の言う言葉を信じてサインしたのが間違いだつたのだ。いざ払えなくなつたら安い金利ローンへの借り換えができるという話だつたが、二〇〇六年以降、住宅価格が下落し家の担保価値が落ちたためそれもはや不可能だという。マイホームを持つというマリオの夢は崩れ去り、後には膨大な借金だけが残つた。

「あの朝街を出て行きながら、一体どうしてこうなつてしまつたんだろうと私たち夫婦は茫然としながらも考えました」

家を出た一か月後にインタビューに答えたマリオはその時のことこう語る。

「正直言つてよくわからないんです。一つだけわかっているのは、単に長年の夢が破れただけでなく、自分たちがその前の苦しかった時代よりさらに底辺に転がり落ちたこと、しかもそこからは二度と這い上がれないだろうという現実です」

アメリカの住宅ブームが勢いを失い始めた時、業者が新たに目をつけたターゲットは国内に増え続ける不法移民と低所得層だった。自己破産歴を持つ者やクレジットカードが作れない彼らでも住宅ローンを組めるという触れ込みで顧客をつかむやり方だ。

マリオのように、英語のできないヒスパニック系には、あまりきちんと説明をせずに契約させるケースが非常に多く、利率も同じ所得層の白人と比べもともと三割から四割高だったという。

連邦政府のデータによると、二〇〇七年一月から六月までの半年間に差し押さえられた物件数は全米で約五七万三四〇



マリオ・フェルナンデス

○件で、前年より五八%増加している。

この債権を担保としたサブプライム担保証券は一般の住宅ローンを担保にした証券よりもリスクは高いものの金利自体が高いために利回りが大きく、ヘッジファンドや銀行が飛びついた。住宅価格が下がり貸し倒れが増えると、日米欧の中央銀行は銀行間の決済が滞りパニックになるのを防ぐために、巨額の資金を市場に供給し始めた。

二〇〇七年七月にアメリカの大手格付機関がこれらのサブプライム担保証券の格下げを発表すると株価は大きく動搖。さらに翌月フランスの大手銀行であるBNPがファンドの一部凍結を実施したことヨーロッパ市場からアメリカ、東京まで株安の波が拡大し、世界中の株式市場を大バニッシュに引き入れた。

日本のメディアは連日金融界におけるこの混乱を報道し、日本銀行は利上げのタイミングについて頭を抱えることになった。

だが「サブプライムローン問題」は単なる金融の話ではなく、過激な市場原理が経済的「弱者」を食いものにした「貧困ビジネス」の一つだ。この言葉はもともと生活困窮者支援のNPO法人「もやい」の事務局長である湯浅誠氏が生み出したもので、貧困層をターゲットに市場を拡大するビジネスのことを指す。

アメリカで中流階級の消費率が飽和状態になつた時、ビジネスが次のマーケットとして低所得層を狙つたシステムである「サブプライムローン」。

連邦政府が発表した二〇〇五年のデータによると、同年、国内でアフリカ系アメリカ人の五五%、ヒスパニック系の四六%がサブプライムローンを組んでいる。白人はその人口に対してわずか一七%だ(Federal Reserve Data 2005)。



金融機関がピンポイントでサブプライムローンのターゲットにした貧困地域*

二〇〇七年の夏にこの状況を振り返つた時、リスクに無防備な低所得層の人々を「商品」として市場原理に組み込もうとしたことは大きな間違いだつたと、ニューヨークに住む金融アナリストのジェイソン・マクフライは言う。

「時代が上昇気流の時はいいが、一度その流れが変わつて破綻した時に一番先に影響を受けるのはリスクに対するセイフティネットのない低所得層の人々だ。その結果、彼らは夢だけでなく人生も壊され、人間として最低限の生活をすることすらできなくなつてしまつた」

サブプライムローン問題などで自己破産をした人々の救済

に携わるマサチューセッツ州のNPO、「ESAC」の住宅問題カウンセラー、バージニア・プラットは、低所得層を狙つてサブプライムローンを押しつけた金融機関のやり方を怒りを込めてこう表現する。

「まるでハゲタカです。最近入ってきた移民たちにはクレジットカード利用歴もなく、ヒスピニック系の家族の三五%はそもそも銀行口座すら持っていないません。こういう人たちの個人情報が金融機関に出回っているんです。それを見ながら地図上に印をつければ「カモ」の分布図ができるがわかる。金融機関の営業マンたちはそれを見てピンポイントで勧誘に回るというわけです」

これらの金融機関による勧誘やその結果による現状は、連邦政府側からも非常に実態がつかみにくいという難点がある。どこかの機関にどんな苦情がどれだけ寄せられているのかは、相手が民間企業であるためなかなか調査しにくいのだ。

「私たちは初め、これは人種差別だとして声を上げようと考えました。でも、そのうちに、どうもそうではない気がし始めました。人種や宗教などを超えた何かもっと別の……巨大な力が動いているように思えるのです」

バージニアの直感はおそらく当たっているだろう。

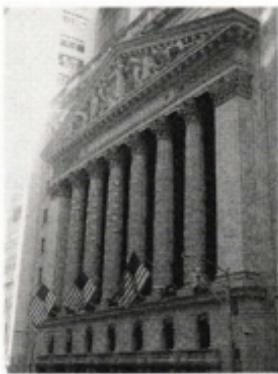
同じアメリカ国内で、貧しいために大学に行きたくても行けない、または卒業したもののは学資ローンの返済に圧迫される若者たちや、健康保険がないために医者にかかる人々、失業し生活苦から消費者金融に手を出した多重債務者、強化され続ける移民法を恐れる不法移民たち……こうした人たちが今、前述したフェルナンデス夫妻と同じように東の間の「夢を見せられ」、暴走した市場原理に引きずり込まれているのだ。

その実態が、今アメリカ社会のすみずみから噴き出している問題一つひとつを検証し、それらをつなぎ合わせると鮮明に見えてくる。

そこに浮かび上がってくるのは、国境、人種、宗教、性別、年齢などあらゆるカテゴリーを超えて世界を二極化している格差構造と、それをむしろ糧として回り続けるマーケットの存在、私たちが今まで持っていた、国家単位の世界観を根底からひっくり返さなければ、いつのまにか一方的に呑み込まれていきかねない程の恐ろしい暴走型市場原理システムだ。

そこでは「弱者」が食いものにされ、人間らしく生きるために生存権を奪われた挙げ句、使い捨てにされていく。

それは日本国憲法第二五条でいう、すべての国民が健康



金融機関の象徴・ニューヨーク証券取引所*

で文化的な最低限度の暮らしを営める権利を侵されることだ。

世界を覆うこの巨大な力によつて国民がそれを奪われ、「民営化された戦争」に商品として引きずり込まれていくという流れは、フェルナンデス夫妻を始めこの本に出てくるさまざまなお例を通して映し出されている。

「教育」「いのち」「暮らし」という、国民に責任を負うべき政府の主要業務が「民営化」され、市場の論理で回されるようになつた時、はたしてそれは「国家」と呼べるのか？ 私たちには一体この流れに抵抗する術はあるのだろうか？^{すべ}

単にアメリカという国の格差・貧困問題を超えた、日本にとって決して他人事ではないこの流れが、いま海の向こうから警鐘を鳴らしている。